

書物と漢字の未来のために

高田時雄

はじめに

現在、書物を取り巻く環境はすさまじい勢いで変化しつつある。もちろん情報技術の進歩による、デジタル化がもたらしたものである。わずか過去十年乃至二十年のことに過ぎないとはいえ、それはおそらく人類の知的営みの条件を根本から変えてしまうほどの革命的な出来事である。そしてわれわれは同時代人として今まさにこの大変革を日々経験しつつある。その変化はやはりデジタル化において一步先を行く欧米において著しいのだが、しかし漢字という厄介な表記法を用いているわれわれ東アジアにおいても、変化は同じく切實に感じられるようになっている。インターネットの急速な普及にともなって、書物のさまざまな流通のしくみが試みられているし、日進月歩の新技術はめまぐるしく新しい商品を生み出している。やがて舊來の書物はすべて電子本に取って代わられるという人もあり、事実、近來の変化にはそれをなすほどと思わせるほどの勢いがある。もしそうだとすれば、書物にとって、紙や印刷術の発明に匹敵する、いやそれ以上の変化ということになるだろう。未来を予測することは筆者の能力を超えるが、現時点での書物をめぐる諸条件について私的な感想を少し記しておきたい。

身近になった書物

一昔前まで本を書く人の数は決して多くなかった。書物を出版する人というのはごく一握りの知的エリートであったといえよう。ところが最近ではだれでも本を出す。そのために出版点数はうなぎのぼりである。出版点数の増加は、読者の趣味の多様化・細分化が原因であると解説されることがあるが、それだけでは説明がつかない。やはり書き手が増えているのである。サラリーマンでも家庭の主婦でも、著書を持っている時代なのだ。ちょっとしたものを書けば本になるという感覚がかなり広く行き渡っている。受け皿としてもっばら自費出版を扱う出版社の数も少なくない。それだけ書物というものが一般の人々に身近な存在になったのである。

その背景には、ワープロの登場とインターネットの普及が挙げられるだろう。それまでの手書きの時代には、書き出す前の推敲からはじまり、何度かの下書きの後、ようやく清書というふうに、煩わしいことが多かった。ワープロという文具によって、この種の煩わしさは一舉に解決された。自由に加筆訂正ができるし、ちょっとした部品はネットからコピーして頂戴してすることもできる。日本全国だれでも著者になれる時代になった。しかし人々は自分が書くことには熱心でも、人の書いたものはあまり讀まない。それが證據に、この國では出版点数が増加している反面、書籍の賣上げは過去十年近くのあいだずっと減り続けている。もちろん自費出版乃至それに近い出版では、ほとんど著者の収入にならないから、印税で儲けようというような発想はそもそもない。ネット上にはその種の文章がイヤというほど轉がっている。したがって最近の新刊書についていえば、書物生産の構造が大きく変化してきていることがわかる。

ワープロ普及の波及効果として、漢字の使用が格段に便利になったということも重要である。カ

ナ漢字變換のおかげで、音が分かりさえすれば漢字を書けるわけで、一々筆畫を逐う必要はない。この頃の入力システムは極めて優秀で、前後の文脈からたいてい一發で正しい漢字に變換してくれる。期待する字と違った場合も、幾つかの候補から適当な文字を選択すればそれで事は足りるから、漢字のかたちを正確に覚えておくことも要らない。便利なのはいいが、間違いも多くなった。同音による間違いが非常に増えたのは紛れもなくカナ漢字變換のせいである。テレビ畫面に流れるテロップにも、この種の問題が毎日のように見られる。

一字ずつ手で書いていた時代に比べて、文章を綴るという行爲が容易かつスピーディになったのは歴然たる事實である。筆者自身もその恩恵に與っているのだから、容易になったこと自体は決して悪いことだとは思わない。しかし漢字に向き合う態度が安易になった面のあることも否定しがたい。自然、漢字の形・音・義それぞれについてあやふやな知識しか持たなくなる。若い世代の漢字能力低下はこれまでもしばしば問題となっているが、カナ漢字變換がその原因とは言えないにしても、少なくともそれを助長していることはあり得そうである。こういった趨勢が續いていくなれば、世代を追って漢字力は急速に衰退していくに違いない。漢字はやがて本来持っている生成力を失い、漢字起源の語彙を書き寫すための單純記號に過ぎなくなってしまおう。身近な存在として氣輕に作り出される数多くの書物では、用いられる漢字はうわべだけで、その實體はもはや漢字ではない、という悲觀的な見方も十分に成り立つ。

電子本の得失

デジタル化の効用はしかし偉大である。中國ではデジタル化を稱してそのまま「數字化」と言うが、すべてのテキストをその名のとおり數字化、すなわち1と0とに分解することで、テキストのさまざまな處理が可能になった。自在な検索、並べ替え、媒体を問わないデータの流通など、デジタル化することで書物は新しい可能性を獲得したと言ってもよい。

書物が手寫しされていた時代には、原則としてそれぞれの寫本はすべて異なったものであった。職業的な寫字生が原本から幾つもの寫本を忠實に作成するようなシステムもなかったわけではないが、しかしやはり箇々の寫本間の異同は避けがたいものであった。その點、印刷された書物は均質なテキストを多数提供できるという意味で畫期的な變化を書物の歴史にもたらしたのである。近代の活字印刷ではさらに桁違いに大きな數量の印刷が可能となり、雑誌や新聞が登場した。それが社會に大きな影響力を及ぼすマスメディアにまで生長したことは誰も知っている。

デジタル化以前の書物は、もちろん検索など出來はしないし、調べものなどをするにはあまり使い勝手のよくないものであった。例えば卷物というような形態を考えてみれば簡単に分かるが、最後のほうに書いてあるところを見ようと思えば、一々そこまで巻き取って行かないといけぬ。これが辭書だったりすると、よくもまあ昔の人はそんな不便なものを使っていたものだと思心するほどである。それでも卷物は結構長い期間用いられたところを見ると、昔はよほど悠長な時代だったのだろう。その後、卷物に取って代わったのは冊子本である。冊子本はどこからでも讀めるという利便性がある。しかし例えばある書物からある人物の出て來るところを探そうということになると、頭から見ていかなければならないのは全く同じである。こうした場合、中國でも昔から苦勞したと見えて、清朝の中頃に『史姓韻編』という書物が作られた。今風に言えば索引だが、史書に現れる人名を韻の順に排列してある。これだと何某がどの書物の第何巻に現れるかを容易に知ることが出来る。しかしその當該巻は更にまた頭から調べないといけぬ。そこでもっと細かな検索が可能となるようにと考案されたのが「引得」(インデックス)で、燕京大學の洪業という人の創案であった。彼は中國古籍の「引得」を一九三〇年から三〇種類ほど世に送り出している。その中には『毛詩引得』『杜詩引得』などいわゆる一字索引(コンコード)の體を爲しているものが多

くある。同様に日本の學界でも『文選索引』『祖堂集索引』など一字索引を作ることが盛んに行われてきた。今でこそコンピュータで処理すればあっという間に出来上がる索引も、當時は一枚一枚カードを採って、それこそ氣の遠くなるような時間と労働力が費やされたのである。大體二〇世紀の中間五、六〇年くらいがこういった索引作成が流行した時代であった。それを考えると今日のデジタル化された書物ははじめから検索が可能なのだから、なにもこういった索引をわざわざ作ることはなく、ネット上にテキストを轉がしておけばそれで済む。好い時代である。

一般の書物でもデジタル化が行われた結果、分厚く重い書物を一々持ち歩かなくても、コンピュータのディスプレイに向かえば、CDからでも或いはネットからでも読みたい書物を手に入れることが出来るのはたしかに大變便利である。とはいえ、現在のところ電子本はまだ満足のものにはなり得ていない。その一は、電子本の読書にはかならず何らかのビューワーが必要だということである。コンピュータでなくても、小型のPDAや携帯電話からでも読めるようになってきているが、電源の問題もあつたりして、文字通りいつでもどこでもというわけにはいかない。持ち運びが出来るといっただけでは充分ではない。手元の好きな本をいつでも取り出して、あるいは鞆に放り込んで好きな時に読めるというのでなければ困るのである。ただし技術の進歩は速いので、電源の問題も含めてやがて解決する可能性はある。紙の書物よりも軽くて、ネットから無限のコンテンツを供給できるような「読書器」が開発されれば、書物の形態變化の動向は大きく加速するに違いない。

さらにデジタル化された書物の数は決して多いとはいえないことが問題である。ボランティアによって入力され無償で提供されるテキストが増えつつあるが、これらは著作権の切れたものに限定される。また出版社などから販賣される電子本の場合は、多くが自社の出版物をデジタル化したもので、そうでなくても賣れ筋を考慮した選定が行われざるを得ない。結局、現時点では、紙の書物で読むことの出来る數量のうち、ごく一部分しかデジタル化されていないというのが現状である。これでは當分のあいだ、舊來の書物は生き続けると考えざるを得ない。

傳統形式への執着

読書の對象となる書物は、バランスから考えて過去に生産された書物のほうが多いはずである。先人が書き残した叢智の結晶は、これまでも多數の讀者を獲得してきたと同様、今後も多くの人々に読み繼がれ、その生命を保ち続けるに違いない。そして漢字で書かれた書物の數量は、それこそ汗牛充棟である。もちろん漢字で書かれた書物には、中國の古典や文獻を含むのである。今日、漢文の読める日本人がどれだけ存在するかという疑問を呈する人もあるだろう。しかし漢字で書いてある以上、そして日本人が漢字を使用している以上、潜在的に読書の對象になり得る。譯注付きの漢文古典は今でも一定の讀者をもっているし、東アジア古代の歴史や文化を専攻する研究者は、漢文文獻を日常的に読んでいるはずだ。

デジタル化された電子本の對極にあるのは古書である。日本は古書店の數も古書を漁る讀者の數も恐らく世界トップクラスである。古書店の數が一國の文化水準を表わすという説があるが、それが本當なら日本は堂々たる文化先進國である。セカンドハンドから、文化財クラスの古典籍まで、市場にはさまざまな書物が溢れている。古書市も盛んで販賣カタログの數は無數である。日本だけではない。中國では近年、古典籍を舊來の線装本で複製することが盛んに行われるようになった。それらは吟味された素材を用いた美しい書物が多い。古典籍の取引もさかんで、オークションでは非常な高値で落札されて行く。

こういった古書に対する愛好は日本でも中國でもなお根強いものがある。職人が一枚一枚をばれんで刷り上げていた頃の木版印刷は言わずもがな、少し前、まだ鉛活字で印刷が行われていた頃

の、黒々したインクでわずかに凹凸のある紙面にノスタルジーを感じる人はまだまだ多いのである。もちろんこういう感覚は世代が変われば簡単に失われてしまうことも考えられる。しかし書物はそれが生産された時代の姿で読んでこそ、本来の価値を味得することができるという考え方にも一理ある。デジタル化して便利に読めれば好いというものでは決してない。もともとの素材や形式をそのままに保存して欲しいという読者は意外に多いのではないだろうか。

(たかた・ときお 京都大学人文科学研究所)